

◎ 課題解決に向けて 行政の取り組みから

① 都市の中のアート

■ 中原正治

1 公共空間に設置するモノ

道路や広場などの公共空間にモノが設置された始まりは、江戸時代にさかのぼると石仏のたぐいだつたと考えられる。神社や仏閣の境内に置かれる狛犬、道端に置かれる道祖神、庚申塚(こうしんづか)など、宗教や信仰の対象となっていたものである。

明治に入ると、神仏分離により寺が廃統合され、多くの石仏のたぐいが破壊された。第二次大戦までは銅像が中心で、国威発揚の意味も込めて歴史上の人物、戦争功労者、政治家、軍人などの人物像が飾られた。また、道徳教育の一環として、二宮尊徳の像が小学校単位で設置された。銅像の多くは大戦中に、金属資源の不足から供出対象となりつぶされた。また、大戦終了後は、戦争礼賛的なもの

は自発的又は進駐軍の指示で撤去された。

戦後は美術的な作品が中心となり、平和祈願のための母子像などが設置されてきたが、いつのころからか裸婦像が中心となっていた。これらはそれぞれの時代を背景に、社会の意志(時の権力者の意志)を反映するように設置されてきた。戦後は民主主義、自由主義により、公共空間に設置するモノも自由な発想が尊重された。しかし、自由とは反面、非常に不自由である。ある人が良いと評価したものを、別の人がひどい作品と酷評することも自由である。人々の千差万別な感性に任ざれてしまうのである。それゆえに、設置に際して、作家や作品の選定に基準を設けることは難しく、まちづくりりにアートを取り入れようとする者を悩ませる。

2 横浜のパブリックアートの始まり

横浜でまちづくりの中に彫刻などを取り入れたのは、橋の欄干や壁画などが初めて装飾的な扱いであった。また、当初は美術作品の市民への開放という意味合いも強かった。例えば一九七七年に設置した「大通り公園」の彫刻がそれである。それまで美術館でしか見られなかったロダン、ムーア、ザッキンという有名な作家の作品を、無造作に公園に配置し市民に開放した。いたずらされたり、壊されたりしたらどうするのかという指摘も多かったが、当時の飛鳥田市長は全く気にせず、市民意識に任せていた。

一方、「港町くすの木広場」(七四年完成)でのアーバンデザインを取り入れた動きは「馬車道モール」(七六年完成)へと続き、ま

写真-1 働く女(ザッキン作)



- ① 都市の中のアート
- ② 自治体におけるアートマネジメント
- 1 公共空間に設置するモノ
- 2 横浜のパブリックアートの始まり
- 3 都市に必要なアートとは
- 4 ヨコハマポर्टサイドの実践
- 5 基金の設立とこれから

ちづくりの手法は着々と実績をあげてきた。レンガタイルや絵タイルを使った舗装や彫刻の設置など、大通り公園での試みと並行して、街にアートを取り入れることを進めてきた。

そして、その後のパブリックアートに大きく影響を与える転換期となったのが「伊勢佐木モール」である。ここでは自動車を排除し、二十四時間のモール空間を人が独占し、様々なストリートファニチャー、彫刻、ミニメントを設置した。パブリックアートをまちづくりの骨格に据えた最初の出来事だった。これを機に、市民は少しずつアートの親しみ、緑と潤いのある街での生活が当たり前になってきた。

3 一都市に必要なアートとは

こうした試みが少しずつ市民権を得て、パブリックアートそのものも脚光を浴び、ビルロビーや道路、公園などには、アートを置くのが当然という風潮になった。この風潮が高まった時期に、バブル経済期という、日本がかつて経験したことのない虚構の経済発展が進んだ。

バブル経済により生み出されたお金はモノとハコに使われた。「犬も歩けばアートに当たる」というほどに街中にアートがあふれ、あらゆる構造物にアートがちりばめられた。彫刻公害という言葉も現れた。誰もコントロールする人がいない。管理もされず、放つともできない。

そして、バブル経済の破綻（はたん）。い

ろいろな計画が根本から見直され始めた。幸いなことに時代はハードからソフト指向に、価値観もモノからココロへと変化してきたため、パブリックアートも市民権が得られ、縮小され経費の削減はあるにしても、まちづくりの大切な要素として考えられている。

現在のように経済が低迷化した時期こそ、基本に立ち戻って、地域性、総合性、実践性、市民性を持ち、歴史性を見据え、時間軸を見つめて都市のアートを考える必要がある。地域の特性や歴史性を把握して地域にマッチしたものは何か、行政は主体になるのか誘導するのかを見極め、市民の参加をどう実現し、総合的にどのような街を期待するのかを、現場に入り議論と実践を進めていく。社長がこの作品を好きだからとか、市長が知っている作家だからとかいった基準ではなく、また、アートコーディネーターやプロデューサーを導入するにしても、その人の価値観だけで作品を選定するのではなく、総合性を持った視点から問いかけていくことが必要であろう。

4 二ヨコハマポートサイドの実践

ヨコハマポートサイド地区では、都市の中にアートを設置する意義を考え、地域性、総合性、市民性という観点から、戦略を練ってまちづくりを実践してきた。ポートサイド地区の開発テーマ「アート&デザインの街」は、文化的で先見性のある響きをもっている。しかし、僕が計画に参加した当初は、具体的に何をすればアート&デザインの街になるのかわからない状況だった。

最初に取り組んだのは、地区の企業の方や職員にアートやデザインの方向性を認識してもらったことだった。柏木博氏を中心に専門家をアドバイザーグループに迎え、アート&デザインを議論してもらった。そして、アートやデザインに密接な企業や人物を誘致し、ビジネスチャンスを創り出すことを課題とした。そのためには街のイメージを固め、宣伝することにより、人々を定着させ、定着した人々を集めさせることである。

イメージづくりのために、広報誌「ギャラリロード」を発刊し、マスコミ、プロデューサー、ギャラリ、企業、オピニオンリーダー約千五百人に直接送付した。また、国際コンテンポラリーアートフェア（NICAF）等でも街のイメージを宣伝してきた。一方、イメージを具体的に表現するために、クレインのライトアップ、デザイン展等を企業の協力により行った。

パブリックアートは新たにコンセプトから考え始めた。ポートサイド地区は旧東海道神奈川宿に隣接する埋立地なので、横浜開港の歴史と同じと考え、新しい街も意識し、歴史性と斬新性の共有を考えた。

しかし、具体的にどのように設置するかでは行き詰まっていた。そうした時に、二つの申し出があった。一つは業務棟（YCSビル）の取得者である三井不動産・相模鉄道グループからのミニメント寄贈の申し出である。三井・相鉄からの案をもとに、アーチストをエットレ・ソットサスに決定した。ソットサスには、現地に来て街の状況を見て、まちづ

写真-3 ザ・ファミリー（ソットサス作）

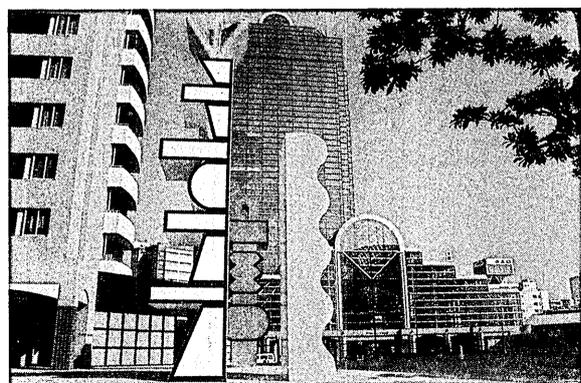
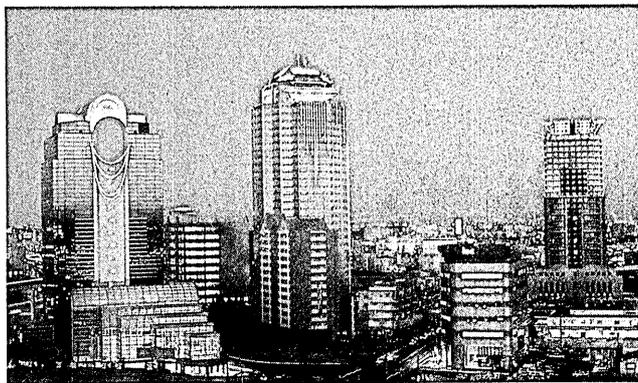


写真-2 ポートサイド地区のライトアップ



くりのコンセプトなどについて、担当者等と議論し製作することを条件づけた。こうして、「ザ・ファミリー」という新しい街にふさわしい斬新なモニュメントが誕生した。

もう一つは、みなとみらい21の二号ドックの石を何かに使えないかという申し出である。これは、横浜造船所二号ドックを解体し、イベントスペースに再生する際、若干縮小するため築造石が余るといふものである。

専門家に石の鑑定を依頼したところ、明治時代に、手掘りで採掘した伊豆半島の小松石であり、味わいといい、歴史性といい、非常に価値が高く面白いものだと結論を得た。そこで、地域住民と一緒に使い方を考えようと、金港公園を題材にワークショップ方式で計画を立てることとした。

地元の大学生、美術系大学生、市民、地元地権者などでグループをつくり、横浜の臨海部やポートサイド地区の視察と分析から始め、公園の立地環境の分析、将来像、存在意義、どのような公園がふさわしいかを議論し、新たな都市公園の案を公の場で発表した。指導した彫刻家岡本敦生氏は講評で、「それぞれのプランは、今までの都市公園の考え方とは全く違った思考回路で作られていた。都市文明が造りだす廃棄物の塊でできた公園、造られた自然ではなく公園自体を人間の手から切り離し自然に放置するプラン、公園全体にライフスケールの人体彫刻を林立させ、人間が都市に集まること自体を問う公園、それぞれが斬新さと大胆さと過激さをもったプランができあがったのだが、その根底を流れているものは、都市文明への懐疑と批判、それを市

民一人ひとりのレベルで想起する空間だとわたしは思っている」としている。このプランの思想を受け継ぎ、岡本氏に基本プランを作成してもらった。同時に、同じ素材で、メインストリートであるギャラリロードの車止め（ポラード）も岡本氏のアドバイスを受けて設置した。

石という素材の温かさ、百年以上経ている存在感、メンテナンスがほとんど不要であることなど、年が経つほど味わい深いものになるのではないかと思う。また、計画に参加した市民がこの街を訪れて、自分がこの公園を手掛けたという記憶が、子や孫に引き継がれていくことも街を愛してもらええる要素ではないかと考える。

これと平行して権利者参加でメモリアルアパート「シュールベルクプロジェクト」の設置も行った。これは、オーストリアの若手作家、エドガー・ホーネットシュレイガー氏が石ころうろ蜜を利用し、足型を取るといふ作品だ。権利者、工事担当者など関係者の足型を建物のロビー壁面に設置した。これには地元権利者のほとんどが参加し、非常に喜ばれた。

5 一基金の設立とこれから

これらの動きと同時に、まちづくり協議会では平成二年度から調査を行い、まちづくりのための基金の設立を考えた。これは、さまざまなアート&デザインの施設・景観の維持経費、イベント等の広報経費を公益信託で賄う新しいタイプの「まちづくり基金」である。街の外観を造るのは初期投資で達成できるが、

街の活性化や維持管理は居住者、企業など、そこに住み、働き、活動する人々の責務となってくる。今までは、街を造ればそれで開発者の役割は終わりとなっていたが、それだけでは街は活性化できず、朽ちていってしまう。そこで当初から企業と住民が一体となって、街を維持していく仕組みをつくることとした。六年度には、横浜市と関係企業からの六億円の出資により公益信託を設置した。今後、街が成熟するに従い、他の企業からの出資が増えていくことと思われる。

都市の中のアトは、メンテナンスがなされず放置される場合が多い。行政の持ち物となる道路や公園の作品は、特別なことがない限り、普通は管理費を予算計上していない。また、公共的空間にあるモノはその管理者が行うが、それも予算、管理の質の問題等で難しいことが多い。その管理費用を公益信託の利益で賄い、アートの専門家を信託の運営委員とし、コントロールできるようにした。

昨今話題の公団施行の「立川ファール」や「新宿アイランド」のように、本格的にコオーディネーターを入れて実施した計画と、ポートサイド地区のように、街の企業や団体が支援する形で計画したまちづくりのどちらが今後生き残っていくか。それは、二十年程度経たねばわからないことと思うが、公益信託が続く限りはポートサイド地区が、活性化と景観維持という街の課題の一つの回答をもっていと確信している。

△都市計画局開発事業調整課課長補佐▽

写真-4 ワークショップで考えた金港公園

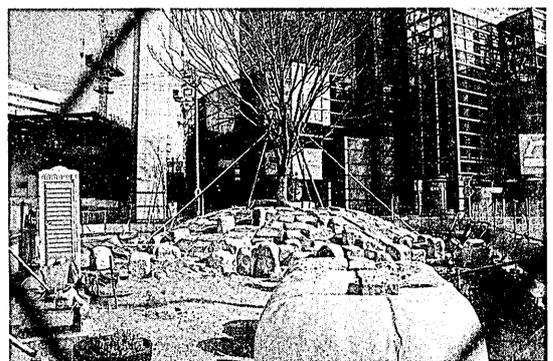
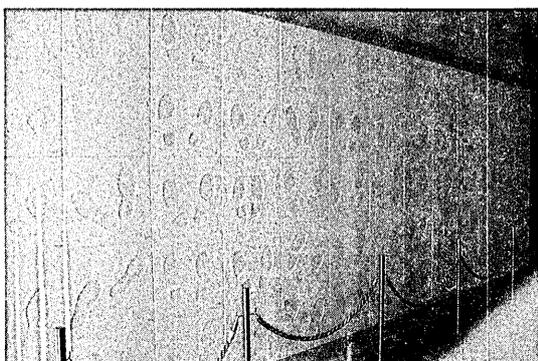


写真-5 シュールベルクプロジェクト (エドガー・ホーネットシュレイガー作)



【主な参考文献】
「パブリックアート入門」 竹田直樹
「現代都市読本」 田村明
「イセザキモールの世界」 地域科学研究所